

## 年次不詳

(二五八) 昭和二一年?

合掌復呈 その後御無沙汰致候処、不相変御病人にて御困りの様子、其上いよく健保の実施にて御多忙の御こと、存上候。本部にも一同変りなく候。小生十二日より四日間断食致候処、不安に相成候には、四日にて打切候。それより重湯、おまじりお粥とやつと今日にては至極元気にて、衰弱も一日、一日、目に見え食事おいしく候。前後を加うれば十二三日ほどかゝり候。断食すると、小生は二日目には食欲無く胃腸収縮等のために嘔気痛味を覚えて、水も湯も嫌になるものに候。飢餓感は一日のみにてさまで苦しくは候わず、唯全身殊に心臓衰弱心細く、断食中蛋白は増すと言う全くの重病人と相成候。しかし重湯より平食に至るに随い、その快復に目覚しきは又おどろくほどに御座候。あとになつて恐ろしきものではないことを知り申候。

二月は後も少し相成候。『めばる』には今度へ行けず、いづれ心急がぬ時、一週間ほど御厄介に相成るべく候。春の聖会に『鮎』からも来られれば、それから後が好都合かと存ぜられ候。

二十一日より夕の勤行に出勤致居候。とても有難く候。

微塵の妥協も胡麻化しも許さず、地獄に逃げることも天上の観念の塔に眠ることも、どうすることも出来ない。この久遠の業障をそのままに諦観せしめ荷負せしめて、真人格の本質を発見せしめ、自覚せしめ、生活せしめねばおかぬとの世界は、あはれ、親鸞聖人の世界唯一つに御座候。全的否定の念仏こそは、げに、人格の本質の顕現廻向の具体相に御座候。二十一日、二十二日両夕、この話に御座候。到底筆舌に尽し難く候に就き、よく御案候べく候。これはやがて、加計か福山かにて歎異抄一章を語るべく、目下唯此章のみ頂戴仕り、感銘つき難きまゝに、御文章の法話に迷信の物忌について語りつゝ、正信との対比に於いて語り候ことに御座候。迷信は畢竟無信に御座候。無信は自己肯定に御座候、如何に学者、善人、智者と雖、無信は畢竟自己肯定、人格の本質の発見出来ぬ人に御座候。無学文盲の博徒より、上は博士に至る迄、人格の成立せざること同一に御座候。先日も大学の助教授、医学博士、本年は厄年なりとて一家を挙げて神様に無病息災を祈願に参上とのことに候。噫。聖人の宿善の有り難き、念仏の世界の限りなく尊きことに御座候。書いてもつきぬに紙つきんとす。しかし迷信の人はそれ故に大悲本願の世界に通じける。ゆめくおろそかに切りすてざるよう、その世界より大悲善巧のみ手は下され候。何となれば大学教授も病死の前には何にもならぬことを知り居り候。

三月例会必ず御帰り相成度候。早々

二月二十三日 (戦後)

蘇晃君へ 兄

合掌 先日は久しぶりにようこそ帰って来て下さいました。私の病気について御心配をかけてすみません。益々元気になり、病氣も少しづつうすらぐようですから、御安心下さい。この度は子供らが一緒に帰って来てくれたので嬉しう存じました。『鮎』に帰ってからは子供らが何時も本部のことばかり云っているとのこと、春の休みには又必ず本部に帰らすようにして下さい。又つる枝さんも、もつと度々帰って来て御法を聞いてくれねばいけません。

二月の例会が有難くて、四日の日にもお話を致し、その時十五日から臨時例会をすることになり、十五日から四日間お話をしました。この度は「親鸞におきてはただ念仏して」と云うことを頂きました。私自身の話ながら大変有難く、鮎が聞いてくれたらと幾度も幾度もおもいました。しかし知らせておかなかつたものですから帰って来る筈がない。阿坂からは十三人も来ました。都谷の住吉から、婦人会主催の講演会に何時来てくれるか、とのこと、其他にも「来てくれ、来てくれ」で心ばかりが躍っています。何とか術もがなとあせります。いづれ故郷に帰る日の近いとも感ぜられません。夢にも出る故郷の人に、念仏によつて会う日のあれかしと切念しています。鮎にも早くゆきたいとおもう。どうか今日一日御念仏を申すこと、本願のみが真実である。信心のみが真実である。念仏のみが真実である。これは同一の意です。他には真実というものはないことをおもつて、いよく、御念仏一道を精進致しますよう。臨時例会にも誠に数々の有難いことを拝みました。今日はこれでおきます。さよなら

二月二十日 夜晃

鶴枝さん

合掌 おてがみありがとうございます。ひさびさで浄子らにあえてうれしくおもいました。

時々「わけえやつら、ぬかるでねえぞ」あれをおもい出しては笑っています。なによりもけうだいなかくすなほに大きくなつてるのでうれしくおもいました。

昨日、秋作伯父ちゃんが帰つて来ました。

伯父ちゃんは一月三十一日付で、安芸郡坂村横浜国民学校長に栄転することになったそうです。横浜国民学校は校長先生も教頭先生も兼務です。(このわけはお父さんに聞きなさい)先生が二十一人ほどいます。秋作伯父ちゃんは小さい学校から大きい学校へ二段飛びをしたわけです。これと言うのもまじめにかんがえてはたらくからです。大きい父ちゃんは(以下欠)

合掌 厚彦おてがみありがとうございます。せんじつはよくかえつて来ました。りつぱにおおきくなつていたのでうれしくおもいました。おおきいとうちゃんがめをさまさないあいだにそつとないしよでかへつてしまったのでがっかりしました。しかしめがさめてみるとかきのかまぼこがなくなつていたのであんしんしました、かえるときにはもたせようとおもつてねたからです。たいへんいゝおてんきなのでけふ(十四

日)はじめてそとにでてみました。厚参らはことりのようにげんきよくがつこうに  
いつていることだろう。はるのやすみにはまたかえつていらつしゃい。さよなら。

二月十四日 大きい父ちゃん  
厚彦君

合掌 先日はお疲れが出はしなかったかと心配しています。鶴枝さんも御足労で  
した。

昨日高品さんが久保さんの使いで来られました。祇園あたりも人が多くて駄目だ  
そうです。音戸には幸原医師が重態で外に誰もいないので、その方を心配しているが  
家がなかなかないそうです。別紙を持って来られたから封入しておきます。

めばるの方は如何になりましたやら、力一ばいやつて見てはじめて因縁のある地に住  
まわして頂くのです。

御念仏の尊いことが暑さと共に身にしむことです。取急ぎ要々のみ。

七月二十五日 夜晃  
蘇晃様

(二六〇) 昭和二三年

合掌 御無沙汰致しましたが御病気の容態は如何ですか、食欲が出て少しは元気に  
なれたと聞きましたが、春以来旅ばかりで講習は度々あるし、全く疲れはて、手紙等  
全く書けませんでした。例会もすみ昨今やつと元気を回復したようです。六月は大  
体本部にいます。月末一週間ほど幹講の論註講義を復活することに致しました。

加計と福山と二十五周年の講習をしましたがいづれも、とてもとても有難い会座で  
した。福山では昔、関係のあつた人たちが福山在から参加し、寺院の人も沢山受講し  
てくれました。何と云つても羽原君や安原君は頭の下る人です。誠にお念仏の尊さ  
を今更ながら頂くことであります。

行くものは水の如く何もかも迅速に変わつていよく、限りなき生死の海の実相を示  
しております。吉見君は昨年の怪我以来未だ全快せず、それに一番孝行で杖とも柱と  
もたのむ二男照雄君(県商出)はこの間死にました。又比島から帰つて来て市内に住  
んでいた太田さんも最近往生されました。吉見、太田の二婦人が今頃は本部に何かあ  
れば働いてくれます。花田君は母上の死で岡山です。

あれも封建性、これも封建性がだんく崩れた後には何が残りましょう。至るとこ  
ろいよく、無明邪智闘争のみが残っています。何もかもお念仏申させることであり  
ます。お念仏してのみ、人生そのものが、生死界そのものが、道場となつてくれるよ  
うです。念仏によつて感ぜられるままが、そのまゝがいよいよ念仏せしめてくれま  
す。

本部のお夕事で自然法爾章を頂きましたが、業道自然、即ち宿業の全てが信の自覚  
を通して自然法爾に生かされたまいし聖人の御晩年の尊さを頂くことであります。

我等が如何に久遠劫来の自力の習気によつて自然の如来の顕現の邪魔をしているかを思うことでもあります。「浄土門の人は愚者になりて往生す。」知性的世界では念仏と云うものはからいになつて、そしてそれがコウじてくるとどうにもならないことをつくづく感じさせられることでもあります。誠に逆謗が死屍とならねばならぬと、二乗も亦死がいとならねば、本願大悲智慧真実の自然の天地はあらわれて下さらないであります。

次に鮎には、六月は原稿を二月分ほど書かねばならぬのと、講習の準備とでとてもゆけないので、七月六、七、八日参上敦したいと存じます。丁度土曜、日曜がないので先生方には気の毒だが、それで許して頂きたい。君の都合は如何かお知らせ下さい。それから後は七月も全てつまっています。

猶講座を開くについて御注文があればそれも申して頂きたい。各地とも大がいは盛であります。美津子がまだ朗報をもたらさないので心配しています。では御体養生に気をつけて待つていて下さい。鶴枝さんはやせていますが元気ですか、子供らは達者ですか。では御大事にさようなら。

六月十一日

蘇晃様

夜晃

(二六一) 昭和二十二年

合掌 秋も深まつて石州では寢床におこたを入れて頂くほど寒くなりましたが、その後御病気の経過は如何ですか。例会の時お便を書いたのですが、投函せずに出たことに気づき又書きたくなつて来て筆をとりました。その後の念仏の病床の有様如何でありますか。定めし如来久遠の御生命の流れたまう現在、永遠の現在、念々に荘嚴したまう有難き光明界裡に、五濁の火宅に悲痛しつつ、念仏していることでありませう。病体といえども念仏すれば、その念々の行歩は寂静の世界に通い、寂静ならしむる徳を、寂滅せしめる光を持つことである。その行歩にして寂滅につれゆく徳を持たずば、遂に一世を庄する功績も遂に虚仮のそらごとの煩惱にすぎず、自損損他の罪悪のみ。而して地球全表面、否一切衆生はこれに満ちています。若し私一人に無明忽然念起すれば、一切衆生界は無明海となります。この無明生死海なるものも、お念仏において照破せられて、本願力によつて浄土の内眷族となり、この世も無相遊戯の道場となります。何事も何事も御念仏の中に受け取らして頂けば、何事も何事も私に御念仏申させてくれます。人生の経験が念仏申させてくれるのか、念仏をひきとめることになるか、その分れが即ち自力他力の分れであります。何事も何事も私を白道の上にかりたて、私に念仏させてくれるに至つて、無碍の一道が展開し、その信、寂靜の身上にかようことでありましょう。浜田では三願転入を語っていますが何時か聞いて貰いたいと思います。誠に果遂の誓願戴くべきであります。是非これは聞いて頂きたい。今日益田につきました。島根は干潮の極に達した感があり、この度の巡行

で一陽来福のスタートをきると云った様子です。山陰は山陽と違って何でもひゞきが遅れます。いよ／＼清算された真相を露呈しています。しかし浜田は盛大なものでした。山口県は満潮です。この月、右田によりますが定めし盛会でしょう。

いよ／＼秋が深くなりました。凋落の秋はしかし深い内省をよんでいます。念仏の行者には何時もいよ／＼時です。十一月には大阪や江州までもゆきます。大阪支部もいよいよ再建です。養生専一に早く快くなつて本部に帰つて来なさい。十月の例会には商船学校から小田君三人ほど来会しました。では大事に。

鶴枝さん元気ですかね、弱りこまないように気をつけて下さい。

十月二十二日 夜晃 蘇晃君

(二六二) 昭和二十一年

合掌 南無阿弥陀仏 御手紙有難く頂戴致しました。承りませば孝子様には二十三才を一期として、み親のみくくに急がれました由、驚入りました。御一同様の御悲しみ、誠にお察し申し上げます。昨年八月六日広島にピカドンが有りましてから、沢山な親たちのつきせぬ涙に接しました。私も子供に死なれた事が有り、如何ほど悲しい苦しいものかよく知っております。誠に人生の最大の苦しみに御出会いなされたので有ります。日がたつにつれて思い出の数々が皆様を泣かせて居ることでありましょう。しかしながらその御悲しみの中に、たった一つせめての御慰みは孝様が御念仏を申してみじかい二十三年を終つて下さつた事であります。

生れたものは死ぬる。この生と死との間、そのつかの間には人は御法をきいて出世の一大事を解決させて頂かねばなりません。我等は唯この事だけのためにこの世に出して頂いたのではないか。然るに多くの人は何も考えず、唯三毒煩惱に追われて何も得ることなくしてこの世を終るので有ります。

噫、国に一人か郡に一人かと云われる、その一人に孝子様は入られました。何と言う有難いこと尊いことでありましょう。百年の命長からず、二十三年の命短かからず、大法なく念仏なくしては何年生きるも同じことです。孝子様お芽出度う御座います。残るものには悲しみがありません。しかし孝子さん、貴女は今や永劫の苦をすてお浄土に大般涅槃の證りを開き、つきせぬ命に生きさせて居られることでもあります。よかつた／＼貴女は今大悲還相の御徳に輝いていられることで有ります。私たち残つたものも間もなく貴女のところに参らせて頂きます。

……然し、孝子さんの御父上御母上の御さびしき、地上のさびしきは日毎にまして行きます。さびしい時にはさびしがります。苦しい時には苦しむのです。手放しで泣くのです。けれどもたつた一つ久遠の御いのちの中に泣き、御いのちの中に苦しませて頂くのです。御念仏の中に泣かせて頂くのです。御念仏のみが孝子様に通じます。いよ／＼精進致しましょう。

先は御悔みまで、皆様によりしく御伝え下さい。南無阿弥陀仏。

二月二十二日

三浦繁太郎様

夜晃

(二六三) 昭和二十一年

合掌 南無阿弥陀仏 まだかくくと大変心配致しましたが、女子御安産の由、誠に安神致しました。深く御喜び申し上げます。何よりもく御安産なさつて嬉しく存じます。その上、一姫二太郎で申し分のないことです。しかし一面には苦勞も増したのですからいよく御念仏申してみ親の大悲のみ心を頂いて養育なさい。法華経普門品には觀世音菩薩を拜んで男子を下さいと願いますれば福德智慧の男子を得、かくして女の子を求むれば端正有相の女、衆人に愛敬せらるるを生まん、とあります。觀音を拜んでも子供は得られないかも知れない。しかし觀音を拜まねば美しい子供を得ることは出来ないとも云われましょう。(この度「觀音觀」を頂くのです。)同封の通り命名致します、御念仏の子になりますように。御食事とお念仏に氣をつけて早く元氣におなり下さい。明日から聖会です。同胞が相ついでかえりつゝあります。

十一月三十日

夜晃

中務みつ代様

(二六四)

「無上甚深微妙の法は百千万劫にも値ひがたし。」  
合掌して御手紙差し上げます。

先日は御足勞で御座いました。長い暗い道を帰つてゆく御二人の姿を涙なしには見送ることは出来ませんでした。さぞ疲れたことでありましょう。唯々尊い精進のみ相合掌して見送らしていただきました。たった一日でもいい。たった一時でも、今日一日でもいい、命のある内に聞きました。今日一つ聞けばそれだけ魂の收穫です。ゆるされた日に一時間でもいい、今日一日聞かしてもらったことを感謝しましょう。無上甚深微妙の法は百千万劫にもあいがたいのです。命のある内に命のある間に聞かして頂きましょう。

合掌念仏致しましょう。悪い心のおこる日も、暗い心の出た日にも、お互いになつかし恋しと思う日にも、他人から悪く云われる日にも、唯々だまつて合掌し念仏致しましょう。其所に道は開けて来ます。決して他人にほめられようとしてはなりません。善人になろうとしてはなりません。「牛盗人と云はるとも、もしは後世者、仏法者、もしは善人と見ゆるように振舞うな」とは、凡夫として生きた親鸞聖人の御言葉です。悪人自覚、凡夫愚禿、地獄一定、決してくよい同行と言われようとして自分を偽つてはなりません。

大地にひざまづいて生きさせてもらいましょう。人に言い訳もいらぬのです。つくろうこともいらぬのです。他人様が進んでいようと止まっていようと心配せぬことです。おぼさんは殊に女だから、他人の心配はせぬように心がけることなのです。悪く云われたら私のことを思っただけで唯合掌して念仏して下さい。み仏が其所にいて下さいます。「お前のは求め方が足らん。」と言うようなことを他人に見てはなりません。それよりも私自身の悪い心、精進の足らぬことをなげきましょう。

でも私はおぼ様が口の人でなくなつたことがどれほど嬉しいことでしょうか。地上を超えて彼岸で会える人たち、それが、それほど沢山あり得るものではないでしょうか。おぼ私たちはどうした因縁なのでしょう、慕われている其の間が唯み仏によつて結ばれているのです。法の因縁ほど尊いものがどこにありませうぞ。お互に合掌して、この尊い嬉しい因縁を仏天に感謝致しましょう。

地上をこえて光明界中で会える人たち、私の心はおどります。私の魂は涙ぐみません。もつと苦しんでもいい。もつとは精進してもいい。もつとは不幸でもいい。彼岸の世界があるのです。そこは唯調和にみちた世界でしょう。

み仏は今も私をよびたまうてあります。いいえ、この生死の苦界に來たつて弘誓の船となつて我を救いたまうてあります。私たちは何時がお会いする最後か知れない。もう再び会えないのかも知れないと思う時、言いようのない淋しい心になります。しかし再び会える世界があると思う時、淋しい中にもほゝえみます。三世につながれた深い因縁をお互に感謝致しましょう。どうか毎日の仕事に精をお出し下さいませ。

道を求めて出して戴く日の嬉しいことを思つて仕事がおくれないように精を出して下さいませ。仕事してるままが浄土聖衆の仲間です。如来がみそなはず時、有漏の穢身のままが浄土にあそんでいるのです。ぼさつの仲間入なのです。

「十方微塵世界の念仏の衆生をみそなはし 撰取して捨てざれば阿弥陀と名づけたてまつる。」光明のふところに生きています。光明の中に働いているのです。精進しないでもいいのですか。

正覚成就のありだけが私の往生です。如来の正覚の全体が私の往生の全体なのです。機よりは、いささかもそへないのです。受け取らなくても、もらわなくても、如来の全体が私の往生の全体です。如来を他人仏にしないように。衆生に立つて云へば、阿弥陀仏のお力で南無するのです。南無とたのむ心は、あみだ仏のお力です。たのませて、たのまれたまうみ親です。南無も阿弥陀仏も共に如来の成就したもののなのです。仏に立つて云えば、光明で撰取して下さい、功德を施して下さいのです。

如来は唯、光明で撰取し、大功德を廻向して下さいのです。このみ心が信じられた時、たのむというのです。唯念仏申さんと思いたつ心の中に一切は成就されてあります。如来正覚の一心のままが、私の上に成就されてゆくのであります。私の機を見て、機の模様を通して如来を見てはなりません。有難いとか、嬉しいとか、色々の模様を通して如来を見るのは、信仰の真のものではありません。如来のみ救いは機によつて定まるではありません。唯々如来の全てをとびこえたお力一つが私を救つて下さるのです。何時もみ仏のみ真実であり、全体であり、信心であり、安心であります。何時も如来にかへるのであります。

一。腹をたてな。腹がたちやこそ仏がおるに。腹がたつ身なればこそ救つて下さる。たつ腹の下から念仏しよう。

一。体を大事に。肉身は生きた仏だんです。

一。愚痴が出るから念仏せよ。未来の大果報を思え、五十年の人生は短い。

一。人に親切に。人に親切すれば法が広まる。俗諦を守れば法の弘通をたすける。

一。水谷の天地で念仏一つに輝いて下さい。

一。又あう日を楽しみに仕事に精出せ。

一。念仏！ 念仏！ 内省！ 精進！ 念仏！

御大事になさいませ。

五日朝書く

平田屋お二人様に

狂風

(二六五) 昭和二十三年

合掌「来ぬ人を待つほのうらの夕なぎに……」先に来て待つて頂くはずであるのに、御姿が聖会に見えず、貴女もそして御孫様たちも御病氣とかで御出なることが出来ないとのこと、会いたいののに会えなくて寂しくおもっています。御病氣如何でしょうか。誠に会えませぬね。明教寺の時も聞いて頂けないし、しかし御念仏申していて下さることだと存じます。先日は○○がまいりました御厄介になりました。盛会だったそうで何よりおく様が久しぶりに御喜び下さったことと存じます。承りますと××君が○○と一緒に山陰に法の旅をしましたとのこと、驚き入っております。誰もようしないことをしましたね、親様の御はからいの有難さをおもいます。長年御二人で御精進下さった御褒美に唯一人御念仏の人が生れたらそれにこした喜びはありません。一人どころか二人も三人も……有難いことであります。私も二月の末から体が悪くて床につきまして、佐賀も久米も六字講もようゆきませんでした、相済まぬことです。然し大分元気がつきましたので右田にだけ参りました。今日二日目です。思つたより体の調子がよくなりましたから御安心下さい。さつき××の娘をよびました。みかんや、うち紫を食べさせて可愛がりました。「刀禰の姉が……」と話が出ました。念ぜられていたことがわかったら、お念仏なさいね。

「この聖人の自然法爾は無作の世界である。がしかし子供の為すがままなる素朴的自然ではない。法に帰依することを通して、一切の自力の功、有作がつきて、そこに開けたる信の自覚。法は衆生の心身の上に生きて、人相の革命までおこして、靈的(身心全我的ということ)自覚をおこすが故に、法は行である、教法は大行である。行が全我的に生きたその内的光景こそ智慧である。信心の智慧である。そこに聖人の自然法爾の無作の天地がある。」

午前の講義の最後のところを一口書いておきます。御大事に念仏なさい。念仏すれば聞いたと同じことですから、機が悪をとり失わぬようにして御念仏申すことが肝



要です。これでおきます。此春の聖会は大変です。嬉しい大変です。もう四百を突破致しました。三百五十から後はおことわりしています。刀禰先生は御来会でしようね。「僕たち」によりしく言つて下さい。「マンマンチャンをする子はよい子」と御伝え下さい。ではさよなら。

三月十七日

夜晃

刀禰む津み様

(二六六)

合掌 南無阿弥陀係

長い間御会いたしませんので一目でもと願っていました、それが実現して誠に嬉しう御座いました。私の部屋へひよつこり御姿が現われた時は、まぼろしではないかと、まあまあよくこそ御立ち寄り下さいました。厚く御礼申し上げます。その上御見舞まで頂戴致しまして御礼の言葉もなく、重ねて御礼申し上げます。あとでも毎日二回お話をしています。時々、おおこもあの時お聞かせすればよかつたなどと、つまらぬことを思います。あの性格、誰とも打ちとけない心の内には、かつて夫より外に入れたことのない、両親といえども一定の間隔のあるあの性格、それが夫を失つたのですから、側の見る目も何とも出来ません。しかし御法のみは、あの心一ぱいの空洞に入つて下さいます。「朝から晩まで、ずっと御法を聞いておればいい」と申します。「先生が何時迄もくいて下さればいい」と申します。しかし講習がありますので、明二十二日、四七ヶ日の御法会をすませて一先本部に帰ることに致します。心はここに残しつつ。

噫。万策つきた時、そこに観經の会座が開く。誰か大法なくして、我に即せる苦悩を荷負して、全ての衆生を代表し、正しき願に立ち上ることが出来よう。無有出離之縁とは、たすからぬこと、絶対なたすからぬこと、随つて、助かろうの欲を棄てること、その時、たすからぬものが助かる。絶対たすからぬものが助かる。助かるものなら助けることはいらぬ、助かるものが助かるとの常識を突破して助からぬものが助かる不思議を直感するのではあるが、これ無限の衆生界への随順ではないか、(生死に随順するものは生死を超える、超えるとは本願大船上の人となること。)一切衆生の内的運命に同じて、一人即全人、これ即、法蔵のはてしも知らぬ群生海に大悲して四十八願をおこされたるその大悲の領解者ではないか、一人が助からねばならない。完全に一人が助けきられなくてはならない、しかし、その一人が、遂に一人であるならばこれ即ち功利的迷信にすぎず。一人即全人、その一人が助けられるもの即ち正法である。二種深信の尊い哉。正法の尊い哉。昨日から今朝迄の御話を書いてお礼のしるしにします。

何の苦、何の悩みも正法によらずば助かりません。共和の地に御夫婦が真に毎日を御念仏に費して下さい。たのみます！ 共和の里にも苦悩に泣く子は満ちていま

しよう。誤って、平面的な職域奉公の言葉によつて私の内の懈怠を許すことなく、日本は心の底にあることを思つて、いよく精進致しましょう。先は御礼迄、南無阿弥陀仏。

この多忙の時に、見舞のためには御出下さらない方がいい、その時間を、御夫婦で讃嘆に費して下さいと御主人にお伝え下さい。

十一月廿一日 夜晃

睦美夫人御中

(二六七)

合掌 母丈よ、生死大海の剣難恐怖の有様、身にしむことである。何を見ても、何を聞いても、御念仏申すことばかり、大悲はこの煩惱業苦のまつただ中に滲到していて下さる。煩惱業苦のあるところには念仏がある。大慈悲ましますが故に。

石井の父が病氣して、濱田と川本と、御法をお聞かせすることが出来ない可悲しんだが、たとえ石井の父は無事でも聞かせることは出来ないであつた。あれやこれやを思い合わすと、御法の聞かれる日は、よくよく恵まれた日であつたのです。聞かれる日を高く買へ買へと、どこからか聞えて来ます。

斉藤様の村葬へ行つて、渡辺の方の導師が西蓮寺さんと後から聞きました。夜、一つ自動車が出ましたが、遂に名乗る機会がありませんでした。九州へ即日御出発の様10子でした。

一寸お会いするだけでも、八万四千の縁がそのように動いて来なければ出来ないことです。私が村葬にゆくことは出来難いことでしたが、遂に遂にそうなつたのです。それにつけて大法を通して会える身の幸をしみじみ思います。八万四千の業障の繫縛のつなが一本もものを言うことの出来ぬ日にのみ、聞き獲させて頂いたのです。しかし、一度聞かせて頂けば、魔事で聞かれなくても、大願業力によつてお浄土へ往生させて頂きます。

御手紙有難う御座居ました。善悪を言う心を見て念仏申すこと。

十月二十五日 夜晃 玉枝法姉御中

(二六八)

合掌 南無阿弥陀仏 先月は苦しい中から御手紙頂いて有難うございました。ようこそ書くして下さいました。念仏していたゞきました。誰に返事は書かなくてもあなたにだけはと思いつゝもどうしても時間がなくて書けません。やつと例会になりました。今日ペンをとる時が来りました。

先ず第一に御念仏の毎日を送っていて下さること、誠に有難くも嬉しく尊いことであります。噫、よかつたく、この春本家でお会い出来てよかつた。涙して宿善の有難さを君の上に拝みます。

人間の心を言へば長く地上にいたい。それはどうすることも出来ない煩惱の声であります。しかしたとい九十、百まで生きても、念仏もなく道もなく生きたのでは、一生は無駄であります。二十歳にもならずこの世を去らねばならぬことは、悲しいことに違いはない。しかし少ししたてば皆同じです。死にとうないままで死んでも大丈夫な本願、死にとうないと言う煩惱の声を聞き、それでも壊れない大信心を獲させて頂いたは幸せ者であります。

今日一日、今日一日が浄土の旅、一日千万両の尊さです。「死なば浄土へまいりなん、生きなば念仏申しなん。」しかし苦しい時には、無理に構えなくてもいいです。声が出ないのでから口の中で申しなさい。まだ苦しく口の中、心の中でも申されずとも、本願の真実にかわりはない。念じつづけて下さるみ親の大慈悲の中ですから。

毎日毎日あなたのこと忘れられない。しかしあなたは私に念仏申させてくれる。「毎日毎日嬉しい日暮しをさせて戴いています」との一言、これだけで沢山です。ようこそ〜と合掌せずにはいられません。

人間の私でもあなたのことを思い出しては念仏するに、本仏み親の大慈悲はあなたの念仏の心のどん底にとゞききつていて一刹那も離れたまわず、大手ひろげて苦しい時に苦しいまゝが有難いことであります。

「別れ路をさのみなげくな法の友 またあふくにのありと思えば」

今度お浄土で御会いしましょう。お父さんお母さんの御よろこびの念仏がここに通うて来るようです。南無阿弥陀仏。

七月二日 夜晷

栗栖克様

(二六九)

合掌 南無阿弥陀仏

御無事御精進が出来て何より結構です。先日は私の好物をたくさん御恵送下さりまして誠に有難う御座いました。三日ほど本部にいましたので十分に頂戴致しました。あまり沢山頂戴しましたので本部員女塾に至るまで賞味させました。誠に心のほど一同合掌して頂きました。厚く〜お礼申し上げます。

御念仏は人間のあらゆるものの手のとゞかぬ領域のものであります。しかしその念仏の開かれる世界は、十悪五逆の自己の深信凝視合掌恭敬の低き大地においてであります。我等は念仏の世界において地上の一切の水火からの超越を与えられ、それは念仏が人間の一切の手のとゞかぬ領域のものであるが為であり、念仏の人が人生に随順するのは、自己に於いて群生海の真相にさめて合掌するが故であります。

一切を超えるとは随順することでありませす。浮ぶとは沈むことでありませす。近頃しみじみと「いづれの行も及びがたき身なればとても地獄は一定すみかぞかし」の御言葉をかみしめて味わさせて頂いております。誰も彼も高いく虚仮賢善の高楼に上つて苦しいくと言つてゐる。何時になつたらこの次にはお目にあたる事が出来ませす。御精進下さい、では御大事になさい。先は御礼まで。早々南無阿弥陀仏  
五月十五日

夜晃

三原定衛様

(一七〇)

合掌 この度は大患の由、御つらいことだろうと日夜「義彦快くなれ、早く快くなれ」と念じつづけてゐませす。承れば病苦の中にも御念仏申してゐること、誠に嬉しく有難く聞きました。有難う存じます。生死大海の唯中に流転したしるしには、お互いに病氣という相となつて現われてゐませす。御浄土には常楽我浄があつて病はない。病のままが病のままに病のない親様に抱かれて御念仏申させて頂くことです。体の病もだが心の病はそれよりも重い。しかし大悲が治して下さる。私に与えられたことは唯御念仏申すことがたつた一つ。

次に御見舞として何もおくるものがないので、御本尊の御名号一幅、小包でおくりませす。二十一日午前中は大方それにかゝつて書いたのです。念仏申しながら。

ついでに今日光遠院恵空と言う人の叢林集を頂いていたら次のような有難いことを見た。「凡そ不謂宗者 安仏像者 その仏像を其家の主として、我も仏家に同在于給仕すと思ふべし。我が家に仏を置くとは思ふべからず、在家猶を爾なるべし。況んや寺たるをや。」と言つのである。私も今日から亭主はやめた。二階の御木像が亭主で、私は親様の家におらして頂かしてもらふのだ。御名号がおつきになつたら、主人の御帰りとおもうべし。仏殿のない家即ち空家なり。御大事に御養生下さい。皆様御大事に、おぼゝさん少し弱つていられるとのこと、気をつけて下さい。

二月二十一日夜

夜晃拜

石井義彦様 外皆様

(一七一)

合掌南無阿弥陀仏……(中略)……先には大蔵経を御供養頂きませす、又この度は敷地拡張し為に多額の御芳志を頂きませす。たとひ如何に沢山な富がありませすとも、その願なく、その志なくば、何事も生れてはまいりませす。今更に尊き御心に對して合掌させて頂きませす。

南無阿弥陀仏、御法は私が利口で聞かして頂けるのではない、み仏の御はからいで聞かして頂くことが出来たのであります。そのことをつくづく味っています。愚弟蘇晃が御盆会を開く為に本部にいました。家内が病気と言うので昨日島に帰りました、残念がりつつ。聞かれぬ時はやっぱり聞かれぬ。聞かれぬ法を聞かして頂いたことは有難いことでもあります。

お盆会には信巻の十八願の御話をしています。今更に十八願のみ心を頂くことであります。大悲の本願なくば我等この世に生れても何の為にこの世に生れ出でたか、誠に無意味に徒らにこの世を苦しみつゝ終るところでありました。大悲本願の御念仏がいのちになつて下さったことは有難いことでもあります。おぼんも亦御念仏しかありません。

御念仏は大悲本願の廻向顕現であります。念を念ずる者は念また念ぜらる。大悲の御念力は今念仏となつて下さつてある。でありますから、如何に念仏したからとて数多く申したからとて自慢にはならない。御念仏申されば申されるほど、そのことを喜ばして頂く。これが報謝の念仏であります。よく喜ぶものはよく頂く。よく頂くからよく喜ぶ、そして更に頂く、それが報謝の念仏であります。

御念仏で御念仏をよろこぶ、御念仏で他のことを喜んではなりません。

(以下略)

八月十六日 夜晃

有井亭輔様 御念仏座下

(二七二)

合掌 南無阿弥陀仏 承りませば御子様のお主人が戦病死されましたとのこと、それに台湾で御子様たちをつれて御帰りになることが出来ないとのこと、誠に御愁傷御心配の御ことと存上げます。たとえ戦病死であつても御奉公にかわりはありません。万人が万人、花々しい戦死をすることは出来ません。地味な生き方をする万人があつて、一人の華々しさがあるのです。決して一つが重く、一つが軽いと云うことは出来ません。それよりも心から忠霊に対して感謝の合掌をささげさせて頂きましょう。一切あるがまゝを受け取つて雄々しく白道を歩ませて頂きましょう。真に超えるとは受け取らして頂くことでもあります。誠に本年は貴女にとつては御両親を失われ、次ぎ次ぎと大事のみの年でした。

人生と云うところは山坂にみちたところではあります。容易でこれを渡らせては頂けない。多くの人は、苦に出会つても喉元すぐれば熱さわすれて、依然としてこの世の楽しみを追おうとします。それ故に苦はたゞ苦におわつて、人生全体が苦海と領解することが出来ないのです、一一の苦が人生全体にとけてのみ、人生を苦海と見る智慧が開いて来ます。しかしそれは、御法を聞いて浄土を知らせて頂き、信心の智慧によらねば出来ぬことです。この人生苦に目覚めたものが、はじめて浄土を知らせて頂き、永遠に浄土にあらしめようとなさる大悲本願が有難く頂けることでもあります。

いよいよ年の瀬がまいりました。御念仏申して静かに歳をお迎え下さい。ではお大事に御念仏精進して下さい。さよなら

十二月二十四日

高橋糸子株

夜晃

(二七三)

合掌 貴方の心持の変転を有難く拝読しました。「今迄の苦しみが無駄ではなかった。それは長いそして苦しい陣痛であつた。如来と共にあり、大慈悲の中にズンブリ抱かれている私であつた。」ようこそく、南無阿弥陀仏。三島さんとは長い因縁です。それがこの度のような苦難を通してぐないと観念的なのが体験とならない。誠にあの御手紙をよんでよかつたくと御念仏申すことです。誰も彼も皆幸福？で絶対必要な宗教ではない。皆記憶された美しい観念でしかない。具体的な全我的大信心、摂取不捨がいたゞけない。人生のどん底に血の流れている念仏の境を体得されたことは有難いことです。

一生涯、愚痴かんしゃくもやまぬでしょう。しかし本願力の前には善も悪も絶対無力、無価値であります。

唯々本願力のみが貫いて下さる。

四月十九日

夜晃

三島駿六様

(二七四)

合掌……お念仏一つが最後の力です。何かあれば念仏がなくなる人も、又何かある時だけ念仏する人もいけない。何にもない時にお念仏一つに生きる人のみ、何がおきても念仏申す人であります。

三月五日

石井母上様

夜晃

(二七五)

合掌 久々にて刀祢先生の御便再拝雀躍拝見致候。御健全にて公務御精励の御事、小輩のよろこび、我輩の健康と同様に感ぜられ候こと、自他一如南無阿弥陀仏の裏に共に生きるためにやと不可思議の信に驚入候。

本年の講習にも又又御出席不可能とのこと、この点、誠に悲しく存上候。

「婦命無量寿如来

南無不可思議光」

わかりたるようにてわからぬ聖典の深味、小輩すでにこの二句につきても玩味又玩味、思惟又思惟、文献をあさり、経典をさぐり、苦悶すでに二十日間をすぎ申し候、噫。何故にかかる雄大莊嚴なる文字なるか。「作正信念仏偈曰」正信念仏！とは何ぞや。不肖正信偈を講義するの資格ありや、念仏の中に論理の糸をたぐりつつ、大信海中の呼吸漸く聖人と一致するものあるやに感じ、必ずや、同胞共に泣くべきものと信じ、今更唯々仏徒の一人たるを慶び申し居候。唯々大兄の御来会なきを悲泣致候、されど昨夏大山駅にての失望悲歎はあまりの唐突にて今更追憶殆んど戦慄をおぼえ申候、それに比すれば本年は前以つての御知らせ、徐々に泣かされ申可く候呵々。噫。何故に、かく迄の思慕ぞ、憶いを同じ無量寿の血流に等しうす。光は天上より降り、力は大地に湧く、これを知り、これに生くるもの幾何！ 大悲またやるせなきを感じ申候。

あわれ、小河幾十里、よしこの身はへだつとも、光明界裏毎日共に生きおり申し候こと、喜びか、はた悲しみか、唯念仏申すべく候。常にく、仏軍の拡大強化のために御盡し下され候こと、有難く存じ候。よしこの身は粉になるとも、六字に生くべく候。正明市、伊佐町、共に他日御回答申し上げべく候。御地法兄たちに、いづれへもくぐれよろしくお伝え下され度、お願い申し上候。

七月二十四日 刀祢哲夫大兄 狂風

(二七六) 昭和一九年

合掌 御手紙有難う頂だい致しました。その後あまりお体にも障らなかつたのであろうかと心配したり安心したりしています。八月の聖会の時は誠に有難う御座いました。こうした非常時に、そして昨年の水害やら供出やらで多忙の時、ようこそ難関を突破して開催の運びにして下さいました。若や母丈やは勿論のこと、同胞方の尊い御心の現れであります。そして又時節柄にもかかわらず、何から何まで御気をつけ下され、み心のこもつたものを毎日頂戴してお礼の申し上げようも御座いませぬ。恵まれすぎて空恐しくすら感じたことで御座います。厚く御礼申し上げます。若にも山々お礼をお伝え下さい。又千代子夫人にはお疲れが出はしませんでしたやら、よくお働き下さいました。来年はどうなるやらわからない聖会です。せめて本年魔事なく頂きましたこと、そして数々の尊いものが残つて下さいましたこと、有難くも嬉しいことでありました。

いよく鎮護国家の正法によつて、諸の聖尊の重愛に依り、この国難を突破させて頂くより外ありません。お念仏一つが力であります。山口県も原田さんが一年かけて待つて下さった聖会でしたのでとても有難い会座でした。

本部でも十日には又学生が三十数名入寮します。長いこと聞いた藤原君たちは廿日が卒業式で出てゆきます。お念仏の世界の豊らかさをしみじみ感謝させて頂きます。学生らに念仏の世界がわからねばせめて御恩を受けた時、頭を下げてお礼の言われる人になれ、それだけでも豊らかな一生となるであらうと言つたことであります。

十月には是非御会いしたいと存じます。益田は九日十日十一日にすると若に伝えておいて下さい。益田には言つてやりました。同胞の皆様は御会いの時はお礼を申伝えて下さい。お体丈夫にして十月を待つて下さい。

九月七日 夜晃

光善寺母丈御中

内観の谷間にわける清水こそ 浄土の池の柔軟の水

法の友にあひ得し時の嬉しきは 念仏より外に言の葉もなし

五濁の世 唯念仏ありて我を救い友を生かすぞ 尊とかりけり

いとたかき高光莊嚴の会座 魔事もなう終りて果す尊き使命

(一七七)

合掌 南無阿弥陀仏

肥川様に承りませば御主人様御病氣にて御養生中の由。驚入りました。その後の御容態如何でありますか。御養生の仕方については肥川さんにお話しておきましたから必ず御実行下さるようには。

長い間御法を聞かれないことですからさぞ聞きたいでしょう。しかし聞かれぬ日の為に聞かれる日に聞かして頂いたことですから、聞かれぬ日には特に大悲を憶念して、御念仏申して下さい。

何事もく宿業であると知らせて頂いて、お念仏の中に受け取らして頂きましょう。御念仏なくば順境さえ人を殺します。御念仏の中に受け取らして頂けば、逆境さえその人を活かします。ですから合掌念仏してあるがまゝを受け取らして頂きましょう。

念を念ずる者は念また念ぜらる。

み親は念仏の貴女を撰取し、恒沙の諸仏は念仏の人を護念して下さいます。今日一日、唯念仏に生きさせて頂きましょう。御念仏で朗らかに御主人の御介抱をなさい。御病氣は必ず全快しきりますから。よろしく言つて下さい。さよなら

八月二十九日

植本八重子様

夜晃



(二七八)

合掌 南無阿弥陀仏

足が悪いそうでお困りでありましょう。さてこの度の一大事のこと、よくお問い合わせ下さいました。お答え致します。

毎日常にいてよく／＼考えられると心の中からはよいことは一つも出て来ますまい。見えて来るものは三毒の煩惱のみであります。これはどなたでもおなじことでもあります。この悪い心があるから如来の御苦勞があつたのであります。南無阿弥陀仏はこうした私ゆえに成就して下さったのであります。

南無阿弥陀仏のお名号の中へあなたが助けられるわけも道理もみなこもっているのであります。一切の願行が成就して正覚をおとりなされたのは全く私をたすけんがためであります。南無阿弥陀仏の親様の中に私の助かるしかけが出来上つていますからあんしんなのであります。その南無阿弥陀仏一つでたすけて下さるのであります。南無の二文字が安心で、阿弥陀仏の四文字がたすける親のはたらきであります。信心まで如来が成就して下さったのであります。南無阿弥陀仏一つでたすかることがわかれば残るものは御恩であります。お念仏申しましょう。お念仏申せばみ親はもとより十方恒沙の諸仏はまことによるこんでおまもり下さるのであります。お念仏申しましょう。お念仏申すことがあなたのしごとです。地獄か浄土かそれはあなたのごとではない。

お念仏申すこと、それがみ親の一切を頂いたすがたであります。み仏はいまも生きていてみ光で照して下されるのにしにぼとけにしにしないようにすることです。今日一日だけお念仏申させて頂きましょう。

(日附不明)

栗栖ひで様

夜晷

(二七九)

合掌 南無阿弥陀仏 念仏しつつ御霊前にささげます。

はあちゃん、はあちゃん。貴女は十八年もの長い／＼病氣という、苦惱を受けはて、今日とう／＼お浄土に先立たれたとのこと。かねて覚悟はしていたもの、今こゝにいた人は、いまさらのように電氣にかゝったようにおどろきました。

はあちゃん、いい子だった春榮さん。よく聞いて、よく念仏したはあちゃん。あの御法を聞く時の嬉しそうなかお。仏の子のはあちゃん。十年病氣にあつても、一度も愚痴言わなかつたはあちゃん。お念仏のはあちゃん、もう一度本部に、それだけ思っていた春榮だった。

とう／＼本部にはかえれなんだが、今浄土に、み親のところへ往った貴女は、今度は思いのままに私たちを護つて下さる。悲しいけれど御芽出度う、この世の春には栄えなかつたけれども、御浄土の常世の春に栄える貴女。

散る桜のこる桜も散る桜。

皆やがてお浄土で会わして頂く。はあちゃん。出世の本懐を全うじたはあちゃん、ようこそようこそ精進して下さい。私は貴女に縁が一番深かった。誠に念仏して有難くも合掌してお浄土に貴女を送らして頂きます。さようなら。南無阿弥陀仏

四月二十一日夜

住岡夜晃 敬具

佐々木春栄様

(二八〇)

合掌 いよく／＼御別れの時が来て何とも申し上げる言葉がありません。唯御念仏して御哀悼の合掌を捧げます。いよく／＼御念仏の一道を精進させて頂きましよう。

同封御香華を御供へ下さいませ。

四月二十一日夜 住岡夜晃

小林忠兵衛様

(二八一)

合掌 度々御便有難う。この度は、佐々木さんや光吾さんが出られて、誠に有難いことでした。一人が精進しきれば、如何に有難いことが生れて来るか、それを思えば、一生相続して御精進下さい。有難い御讃嘆の花が咲いていることだろうと存じます。皆様によろしく。

一月二十一日

住岡夜晃

小田清三様

(二八二)

合掌 今山に大賀君が来ています。私も七日から山に来ています。それは、広安の兄が戦死したためです。大賀君に聞けば、岩田さんが病氣養生の為に、貴女の家に来ていたとのこと、御多忙なことでありましょう。しかし、よくこそ御世話をしてあげてくれます。私からも厚く厚く御礼申し上げます。よくこそよくこそ、岩田さんも同胞の家でどんなにか嬉しく安心して養生していただけることであろうかと想像しています。

どうか、見てあげて下さい。そして、御念仏と一緒に申して看護してあげて下さい。病気がどの程度かさっぱりわかりませんが、一時は熱も大変高かったとのこと、今頃は如何ですか。はがきでいいから御様子を知らせて下さい。

人生は、誠に火宅無常とて一時も外に安らかさはない。唯々、内に如来大悲本願の大信心があつて、安らかさを得させて下さるだけであります。念仏より外に力になるものも、あてになるものもない。念仏のみが未通りたる力であることに目覚めた人は、誠に真実の智慧者であります。この人のみ、外に波が高くても、それを超えさせて頂くことが出来る人であります。有難いことにしてもらひましたね。

岩田さんを頼みます。今こそ、念仏の同胞の尊さを発揮して下さい。お願いします。

十一月二十日

三浦恒代様

住岡夜晃

(二八三) 昭和二十一年

合掌 南無阿弥陀仏 その後、御変りは御座いませんか。私の病氣心配かけてすみません。少しづつはよくなつていますが、未だ全快ということに至りません。三月の巡講は、代理として花岡君を、浜田、田橋、井野、黒沢とゆかせます。先日は、高島海苔沢山有難う御座いました。時々おいしく頂いています。次に本部の修復費について、御心配頂きまして有難うございました。今は、一人々々に御礼状出させぬからよろしく御伝え下さい。猶、これから御出し下さる方は、一度に出して下さいさなくても、毎月にかけてでもいいですから、その様に御取はからい願います。

三月の例会も有難くすみました。この度は、明覚寺と江角さんが来会されました。春の講習には、必ず思い切つて出て下さい。今度は観経の真身観ですから、是非聞いて下さい。

同胞の皆様によろしく御伝え下さい。いよく、今日の生活は、八風吹きすさび、五濁増の時とて、この生死動乱の唯中に生きさせて頂くには、御念仏より外ありません。皆、お念仏の中に苦悩の一切を受け取らして頂いて生きさせて頂きましょう。そうすれば、生死動乱の苦悩は、お念仏の尊さを発揮する縁となりましょう。私も御念仏して様々に御法を頂き、再び起つ日を待たせて頂いています。御念仏の華は、誠に、衆生貪瞋煩惱中に開いて下さいます。内観の一道を忘れぬようにと、くれぐ御伝え下さい。先はお礼迄。早々

三月六日

三浦恒代様

住岡夜晃

補遺

(二八四) 昭和一七年

不住生死、不住涅槃。

合掌 如何ですか、病気は悪業中の悪業ということをうんと知らされます。同朋に御法を御伝えすることが出来ないで、せっかく待つていて下さるのに相済まぬことです。しかし、悪業の中にいよく、お念仏の有難いことです。お念仏はこの世のものではありません。何時になつたらお会い出来ましょう。お大事に。上むきのまゝ書いてたのです。

二月六日 夜晃 石井母上様

(二八五)

合掌 おかげん如何ですか。私のはボツ／＼よくなっています。愚禿抄に執持三あり、已今当然ということがあります。執持とは信心のことです。念仏の大信心は、過去にも信ずる人あり、現在も信ずる人あり、未来にも信ずる人ありという事です。過去になければ、汝の独断です。未来になければ迷妄です。已今当の真実です。現在にたつた一人であろうとも、それは広大なことです。

(二八六)

合掌 今日是有難いお便りを頂いて有難く何度も拝見いたしました。いよく、大法のみ尊いことであります。今日は刀禰の奥様から有難いお便り頂いて恵まれました。山のお母さんのことが書いてあります。聞きがたいのが念仏の声であります。仰せの通り随順すること、そのことを頂いております。我がお念仏を申すか、お念仏が我を知らせ、我をとかし、我を生かして下さるか。体の養生と心の養生を一緒に生きさせて頂きましょう。よくなるまで何十日でも、何千年でも、じつと仰せの通りにいたします。安らかです。

さよなら

(二八七)

合掌 いよく、念仏の世界に出されたという事は大きくてあります。念仏のわからぬもの程平気であります。腎臓病に苦痛がないから健康と間違えているように、正

法によつて賑をとつて頂いて、病という事に気づかねば、正法に随順するという事は  
ありません。病人にならして頂くことを静かに思っています。

(二八八)

合掌 その後御加減如何でありますか。津山の校長は心臓肥大、肝臓肥大で、これ  
又、病床とのこと。誠に生死業風のはげしきことであります。父上のおつむは如何で  
しょうか。今頃は唯念仏して涅槃経の御意を頂いています。病は悪業そのものであ  
ります。つくづくそのことを思います。はるばる島根から来た人に、一席も講堂で話  
してやることも出来ない、語られないという事は、聞かれないという事であります。  
しかしながら、如来の本願は地獄一定の深信凝視なくしては信ずることが出来ぬこと  
であります。微塵の自力廻向の心なき地獄一定の我を大悲の胸中に発見するという  
ことは、困難中の至難であります。病の床に於て静かに、より深くこの事を知らせて  
頂くことは、有難いことであります。

(二八九)

合掌 この手紙は東京をよい子にするために書くのです。仏教の究竟の相として  
の弥陀本願の絶対他力、それが世尊の自證です。出世の本懐でありました。この心を  
もつて涅槃経を頂きます。世尊も深重なる無明業苦を内観して自力無効を深信して、  
深く如来の本願を憶念したまうことであります。病氣して、いよく世尊の御心を念  
じ、純粹無雑な念仏の世界に入らして頂きましょう。それは罪業深重を真に知ること  
です。

(二九〇)

合掌 南無阿弥陀仏

御手紙有難う御座いました。女塾が毎日便りを伝えてくれますから有難い事です。  
お念仏によつてのみ、時と処というへだたりを越えて、無碍に会わせて下さいます。  
御念仏で一つでないならば、会つても千里の隔たりがあります。でも早く当番に來  
て下さい。

(二九一)

わが心 きのふも今日も暗かりき

業報になく はらからゆへに

かにかくに念仏申せ はらからよ

せん術もなき生死海かも

悲しきは生死の海に泣きもせず

笑いも得せぬとじたるこゝろ  
聞き得ぬと泣く子も悲し それよりも  
聞きつゝ聞かぬ子の泣かしむる  
み仏は泣かしめんとて この我に  
念仏たまいしか 法たまいしか  
世をあげて ほろびの風は狂ふとも  
わがゆく道は ひとすじの道  
称ふれば うらみくやみの雲はれて  
胸には残る信心の月  
よもすがらねむりも得せで念仏になく  
秋の夜ながの淋しかりける

(一九二) 昭和六年

合掌 この度ははからずもあなたに御出会い致し、新らしき友を発見したるよろこび、何にもたとへようがありません。これ小生が常に、七宝の蓮華界より生死界に化生して、不住涅槃の意味に遊戯する所以である。法兄亦、美弥の天地に多くの友を発見したるよろこびに、お念仏のことゝ存じます。綾木は午前午後、徹底したる準備と会合にて、たちまち占領致しました。

一つの火が風にあふられて飛火する。そこに煩惱の薪がある。火がそれをなめる。生命の内奥より燃え出づるこの火……

六字の靈火！ 至る所に燃える。

噫。本願よ。弘誓よ。大悲よ。智慧よ。救済よ。大信よ。大行よ。真実よ。仏性よ。生命よ。大道よ。報謝よ。感謝よ。懺悔よ。浄土よ。如来よ。

唯、南無阿弥陀仏をおいて他にあることなし。永遠にあることなし。如来は我等の無意識界に寂定し、意識界に神通する。我等の意志活動をまきおこさざる如来あることなし。

無限の生死界に化生せよ。七宝の懈慢界に徒らなる独善を楽しむは菩薩の死なり。

……

法器折角自重なれ！

昭和六年五月八日 狂風

西信法印殿

(一九三) 昭和六年

合掌 引き続き御苦勞で御座いました。遠路でお疲れだったことと存じます。この度は徳山、下松地方にはつきりと足跡を印することが出来て嬉しいことで御座いま

した。これも全く法兄を通して慈光の輝くこと、これを拝してもいよ／＼やらねばならないことが、はつきり知れて来ます。

奥様の御信境の進展、何より嬉しく尊く存じます。坊ちやまをおんぶしての御苦勞、全く合掌の外ありません。恥かしいとも何とも思わず、自分を欺かず赤裸々に自分をさらけ出して求道することは至難なことで御座います。我執の大魔はそれをば、さしとめようとします。然るに如来の願往生心はそれよりも強く、遂に奥様をして長い間を悪戦苦闘せしめて、白蓮座上の希有人としてしまいました。一人の人間の更生、如来の大願心に往生すること、それより大きなことがどこにありましょう。

強かるべきことに強く。弱かるべき所に弱くない。それを見るとついに、例のやかましい私になります。大法以外に何もありません。

ほんとに丸いのは結構。しかし丸い故に尊いのではない。金剛石それ自身が尊いのだ。丸くないものが、丸をたしたり、角をかくしたりして丸く見せる、醜悪以外の何ものでもない。

死の平和よりは、平和への闘争だ。丸くなるのは七十歳位で結構。詩ならば丸い世界が、一時に十行でも二十行でもかかれる。

生活幾十年、苦闘の結果、成就する一行の詩、全身全霊そのものの詩。

詩だけ出来て生活のない人、私はかゝる感傷主義を嫌う。

今日も亦心が躍る。高いレベルを心がまつすぐ見つめる。行こう、行こう。迫害、結構。攻撃、結構。理解も結構。遂に一切結構。おなかの中で何かしら、くすくす笑う。

では十一月に！ さようなら……御本典しつかりおやりなさい。

昭和六年十月二十五日

狂風

正覚法印様

(二九四) 昭和七年

合掌 大法に終始する者は生き、大法に反逆する者は滅ぶ。強く明るく正しく生活する者、そは身を以て如来を顕現する者、愚禿と名告つて合掌し、魔軍を感謝懺悔の裏に超克せる、無意識の法蔵。

愚痴を感じて愚痴におらず。貪欲を観じて貪欲におらず。瞋恚を痛んで瞋恚におらず。この念！ 南無阿弥陀仏を何ものか！ よく染汚するものぞ！ 大法は強し！ 見よ。周防の一角、念仏によつて占領せらる。徳山での成功、衷心感謝に堪へず。

如来は人を恵みたもう。御二方の足並そろつての御求道、合掌の外なく、奥様には院主師のかげを見失わざるように御精進これなり度し。来る日も来る日も、念仏の裏にお会い致し、光明界裡、永遠の同胞なるを喜びつつ、いのちを大法に捧げて、一人にてもこの道にさそい、如来聖業の強さを、身をもって立証致したし。

雪舟の庭、御門前の桜ぼつ／＼蕾もほころぶことと推察、あの風呂の湯の味、到底他にて味わうの由もなし、一里半の道を歩け、然らば汝をして味わしめんと仰せあるか。

御二人につれられて、坊ちゃんも時には御苦労のこと、恵まれたまいし御二人のこと、今朝は特に脳裏を去らず、紙に托して、久米の里に送る。

人になりたし、人になりたし、大法を完全に盛る人になりたし。日夜辛苦すると雖、常人の域を脱せず、いささか自訓を掲げて自省すること日夜。

お互にいよ／＼求道精進の本舞台により、人生の真面目を發揮いたしたし。御法体御大切になさいませ。頓首再拝

昭和七年四月十一日

狂風

柳田西信様

(二九五)

合掌 南無阿弥陀仏

先日は御厄介になりました有難う御座いました。御疲れになったことだと思いません。それに徳山へも出られましたし、しかしよくお聞き下さいました。真実に大法が耳に入るようになることは容易なことではありません。み光によつて自己が見えて来るのもなか／＼のことです。悪人と言うも地獄行きと言うも言葉の末の型にすぎない。しかし文字や型は生きた心とは違う。生きた心と生きた大悲、それが凡一如に味われて来るのには、尊い大経の会座の人にならせて頂かなくては出来ません。随分ながい間、私をすら待たせたものではありませんが、じつと念じつづけ給う大悲を憶はずにはいられません。

しかし堂々たる住職でありながら、文句の末にかかわつて賢くなつて聞き得ない人もあります。それを思うとよく今日まで聞きぬき求めぬいて下さいました。奥さんにしてはつきりせねば、院主の世界に墨をぬります。子供衆の上にはつきりとしたものが出来ません。貴女が一本道を歩みきり念仏に輝いて下さることは、長く尾をひいて光ります。有難いことです。いよ／＼これから毎日をみ法によつて育て、頂き、信心歓喜の一道を歩みつゞけて下さることを思うと、嬉しくなりません。院主にかたりかけて例会でも何でも一言一句でも土産話を聞いて得をとりなさいよ。

今日一日が平凡に平凡に、お念仏をのけては、平凡に続きますよう。「二乗」(『聖光』) よく／＼お読み下さい。真に善知識ある者は決して独覚にはなりません。真に念仏する者は決して声聞にはなりません。安心して自己を知り、如来を知ることに進まして頂きましょう。

十一月には一日でも、又徳山に出ていらつしやいよ。可愛い、坊等が無事で成長しますように。

昭和十一年十月五日夜 義田坊前講中に 夜晃



合掌 南無阿弥陀仏 昨日今日はいいいお天気になりました。お変りはありませんか。光明の原稿がすんで、ほつと一息、それでもとても忙しい私ですが、貴女を思うてペンをとらねばいられません。何時もく留守居させて、淋しい思いをさせます。相すまない気がします。

私が病氣した時は御心配かけました。中井へ頂いたお手紙を今も今一度拝見致しました。そして岡山へは、お見舞いまで頂きまして、有難い御心づくし勿体のう存じました。

奥さん。お念仏申してお留守をして下さい。お念仏の中にお留守して下さい時、真に一人ではないことがわかりましょう。そして貴女のお念仏の相が……。

奥さん、釈尊の御在世に一人の婦がいました。富んだ家に成長しましたが、使つていた男と恋におちて二人で家を出ました。子供が出来る頃から世の荒波はこの夫婦の上にさまざまとおしよせました。二人目の子を生む前になつて、生活の苦しきから、生家に一家そろつて帰つてゆくことになりました。その途中で恐ろしい暴風雨に遭いました。それにおどろいて急に産気づいて子供が生れました。然し夫は暴風雨の中で毒蛇にかまれて死んでゆきました。彼女は二人の子供をつれて、ある川を渡ろうとしましたが、一時に二人の子供は抱けないので、先ず小さい子を抱いて川を渡りましたが、渡りつこうとする時、残しておいた上の子が母を慕うて泣きながら川の中へはいりました。小さい子を急いで岸において引きかえしました。しかし大きい子は、母が行かない先に流れて死にました。泣く泣くひきかえそうとしますと、向う岸に残した子は、恐ろしい悪獣のために奪われました。彼女は僅かの間に夫と二人の子供を失いました。狂気の如く生家に帰つて見ると、生家は火事のために跡方もなく灰になつていました。そして家族は皆焼け死んでいました。

彼女はたつた一人、天地の間にほうり出されて、遂に狂人になり、町をさまようていました。そこへ世尊が通りすぎられ、やさしい大慈悲によつてお救いになりました。これがバータチャーラーと云う尼僧であります。かぎりなき人生の悲しさをなめつくした彼女は、後に大変にやさしいすぐれた尼僧となり、あとから来る人たちを心から世話したそうです。

奥さん。この女は事実あつたことですが、貪欲のみの中に生きていることは、この女の通りを行つていられるではありませんまいか。夫も子供も、家も全て、食われ焼かれ呑まれていられることを知らずにいる。自分のものと思つていられることは悲しいことでもあります。一切は大慈悲の中に抱かれなくてはならない。六月号の『光明』が行つたら、よく読んで下さい。「慈悲」のこと。

貴女も亦一日も早く本部に帰って来て下さる日が来るように、八月が待たれます。先日徳山へはよく出て下さいました。お念仏の中で暮して下さい。お念仏の中でお会い致しましょう。

今日一日が至高至福、尊き一日でありますように。人生は又と清書の書きかえは出来ません。ではお大事になさいよ。今頃は体の工合はいいですね。

昭和十二年六月十日

夜晃

柳田貞子様